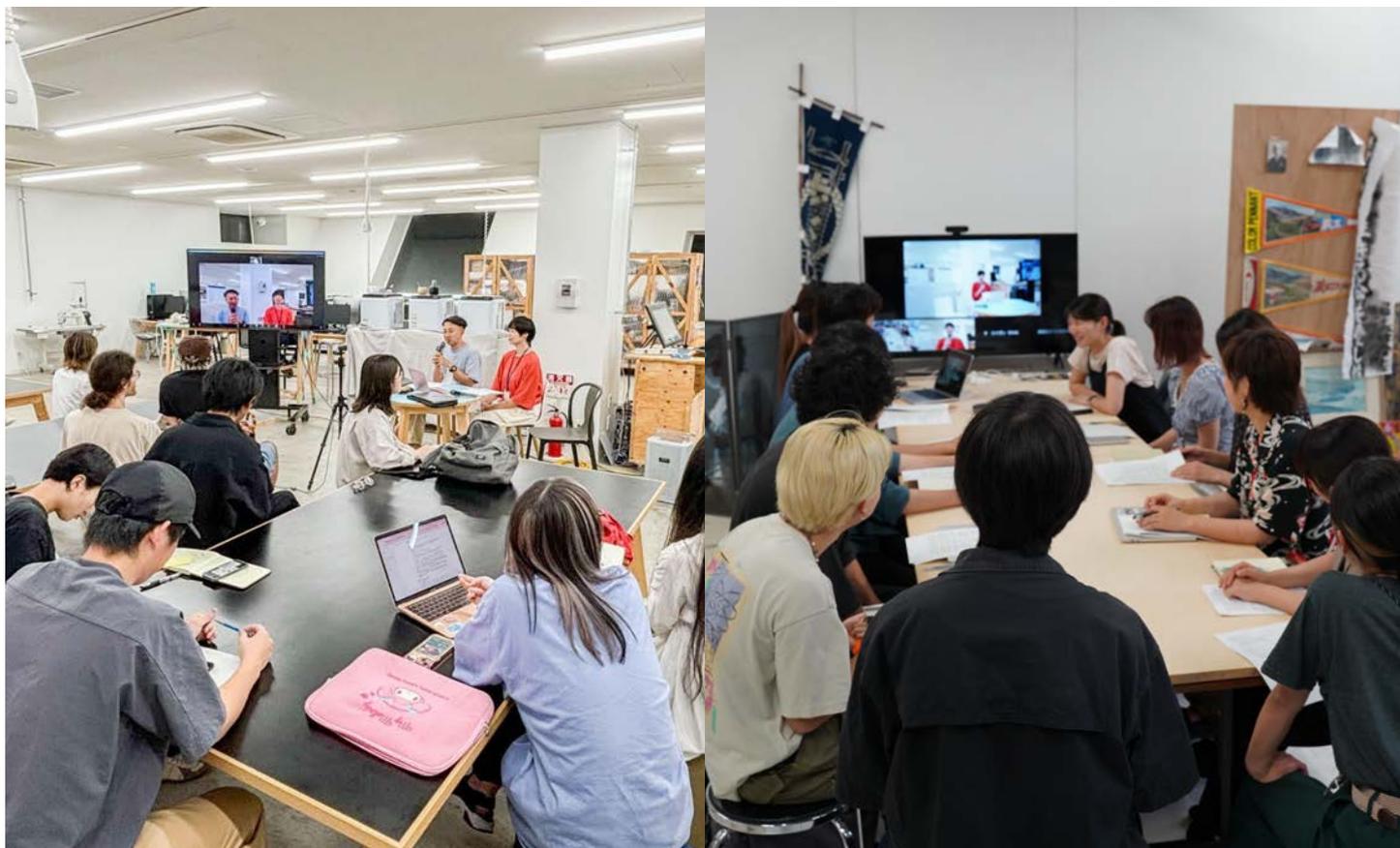


Gatherum News



DOUBLE ANNUAL 2025 始動

2017年度のKUA ANNUALを皮切りに始まった学生選抜展は、2022年度から京都芸術大学の姉妹校である東北芸術工科大学からも作家を選抜し、DOUBLE ANNUALと名称を変更した。通算3回目のDOUBLE ANNUALとなる今年の公募テーマは「omnium-gatherum(オムニウム・ギャザラム)だ。プリコラージュやごちゃ混ぜを意味する英語ないしラテン語のこの造語は、今回のDOUBLE ANNUALをリードする2人のディレクター、堤拓也と慶野結香による提案である。堤は京都芸術大学の卒業生でもあり、在学中にウルトラファクトリーが完成したと話す。現在は滋賀に在る共同スタジオ「山中 suplex」の共同プログラム・ディレクターも務める。慶野は現在青森県の青森公立大学国際芸術センター青森(ACAC)に所属し、東北芸術工科大学との打ち合わせには仙台を経由し片道3時間の大遠征をもいとわない。東京大学総合研究博物館で修士課程を修了したのち、JICAの青年海外協力隊(学芸員)としてサモア国立博物館に赴任した経歴を持つ。さらにこの2人とタッグを組むのは、KUA ANNUALディレクターとして本展を立ち上げ、以降も監修として関わってきた、森美術館館長の片岡真実である。京都芸術大学大学院客員教授でありながら、初代国立美術館国立アートリサーチセンター長も務め、2027年開催予定の「ドクメンタ16」の芸術監督選考委員会にも名を連ねている。今日の現代美術の最先端を走る3人の競演によって今年のDOUBLE ANNUALは走り出す。

京都芸術大学および東北芸術工科大学から総勢77組94名の作家の応募があり、この中から11組16名が選抜された。これに、各校から4名ずつアシスタントキュレーターや広報活動などを担うアート・プラクティショナーが加わり、総勢24名の学生が今年度のDOUBLE ANNUALに挑む。作家たちの作品概要やコンセプト、アート・プラクティショナーたちの活動については今後の「Gatherum News」で紹介していくのでぜひ引き続きチェックいただきたい。

次号で詳報するが、DOUBLE ANNUALチームは8月末に初となる東京合宿を開催し、本展開催以前に京都と山形の学生、教職員が顔を合わせる機会を得た。8月の対面での作品レビューののち、今後はおおむね毎月のペースで、拠点ごと(対面)と合同(オンライン)の作品レビューおよび打ち合わせを実施する。12月には各大学でプレビュー展を開催し、本展に向けたブラッシュアップを行う予定である。

DOUBLE ANNUAL本展は東京・六本木の国立新美術館の3A展示室を舞台に展開する。会期は2025年2月22日から同年3月2日まで。春休み真っ只中のにゃんこの日からひな祭りの前日、新進気鋭の学生たち、それも京都と山形が入り乱れる展示の機会である。ぜひ足を運んでいただきたい。

Interview

今年から DOUBLE ANNUAL のディレクターに就任されましたが、現時点で感じていることや、今後楽しみなことはありますか？



堤拓也 *Takuya TSUTSUMI* 〈京都芸術大学ディレクター〉

今年からディレクターをやらせていただくことになり、募集テーマの決定、要項作成、事前相談会の実施、たくさんの応募者の中からの難しい選考、キックオフミーティングと、あれよあれよといううちに一泊二日の東京研修の日。どうなることかと思いきや、初日は二次会までほぼ全員参加の合宿らしい合宿。令和に珍しいな、という感覚をいただいたのはわれわれミレニアル世代だけなのかしら。とはいえ、このごちゃ混ぜ感を感じていた通りで、嬉しい気持ちで帰路に着く。



Misuzu KOSAKA 小坂美鈴

京都芸術大学〈作家〉
芸術専攻 美術工芸領域 修士2年

二次選考の際に、私は自信と緊張の両方の感情を抱えていました。私は来年修了のため、最後のチャンスだと思い「落選するわけにはいかない」と必死でした。数分間しかないプレゼンと質疑応答の時間で、いかに自分の作品がテーマに沿っており、大掛かりな計画でも実現可能であるかをアピールするのに力を注ぎました。



Guo Weike カク・イカ

京都芸術大学〈AP〉芸術専攻
情報デザイン・プロダクトデザイン領域 修士1年

omnium-gatherum というテーマを見た時、すごく興味を持ったから、申し込みました。初めてこういうイベントに参加するため、ちょっと緊張していますが、チャレンジしてみようと思います。実は最初の選考の準備から、二次選考までですでに、もう多くのことを学びました。異なる分野の先生や学生と一緒に展示会を作り、学ぶことができる貴重な機会です。デザイン分野の学生にとって、自分の技術を活かすいいチャンスだと思います。



慶野結香 *Yuka KEINO* 〈東北芸術工科大学ディレクター〉

4月から動きはじめた「DOUBLE ANNUAL 2025」(以下、DAと記載)ですが、今年度からの新たな試み、8月の京都山形合同の東京合宿も無事終了し、まずはそれぞれの制作に邁進する秋がはじまりました!驚いたのは、今年のDA参加者は作家もアートプラクティショナーもノリがいい!みんなコミユ力高くてびっくりしています。これが募集時に、堤・慶野で設定させてもらった「omnium-gatherum」というテーマとどう引き合うか、非常に楽しみです。参加者のみなさんにとって、学生生活でやってよかったことのベスト1にDAがなるように、ディレクター陣でもあれこれ考えていけたらと思います。

これまで書類選考や面接がありました、今回どのような想いを持ってDOUBLE ANNUALに臨みましたか? また、今後の制作への意気込みを教えてください。



Riku EIMURA 榮村莉玖 Modern Angels

東北芸術工科大学〈作家〉
美術科 洋画コース 3年

選考ではコレクティブでやってきたこと、やりたいことをうまくパッケージングできた。DAに2年間落ち続けるという結果とプロセスに逆行することで友達以上家族未満のようなコレクティブとなった。培われたものをgatherumし、新たな出会いを求めてDA2025に臨む。コラボレーションできることが、DAの醍醐味だと思っている。DA2025で新風を巻き起こしたい。

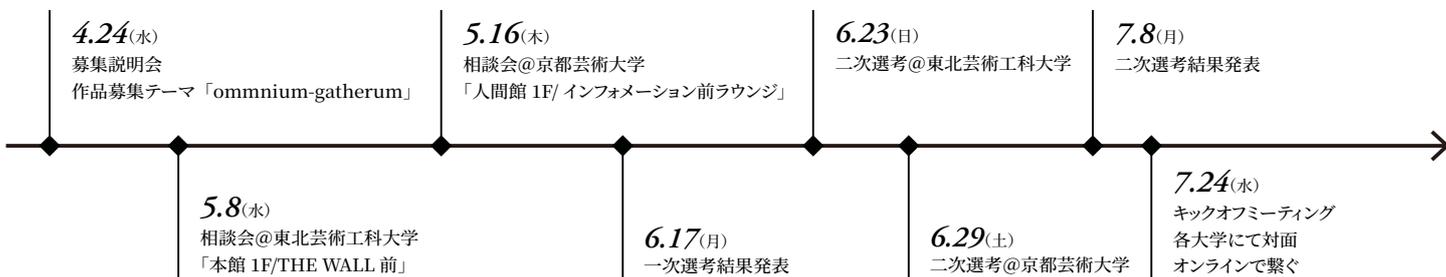


Sae SATO 佐藤彩衣

東北芸術工科大学〈AP〉
工芸デザイン学科 2年

今回、多くのアーティストやキュレーターの方々と関わることのできるチャンスだと思い、なんでもやってみようというチャレンジ精神を大切に臨みました。実際に合宿では積極的なコミュニケーションをとり、チーム力を得ることができたと思っています。今後もより良い展示のために全力で取り組みます。

Timeline (募集説明会〜キックオフミーティング)



DOUBLE ANNUAL 2025

参加作家・アートプラクティショナー

【作家】11組16名

・京都芸術大学



菱木 晴大 | Seidai HISHIKI
美術工芸学科 染織テキスタイルコース 3年



ニコラス・ヴィオラ | Viola Niklas
芸術専攻 美術工芸領域 修士1年



張 子宜 | Chang Tzuyi | チョウ・シギ
美術工芸学科 写真・映像コース 4年



小坂 美鈴 | Misuzu KOSAKA
芸術専攻 美術工芸領域 修士2年

Dbl.RT FW



曾 旭鵬 | Zeng Xipeng | ソウ・ギホウ
芸術専攻 美術工芸領域 修士1年



黄 安琪 | Huang Anqi | コウ・アンキ
芸術専攻 美術工芸領域 修士1年

Itsushi Group



田 英凡 | Tian Yingfan | タ・エイボン
芸術専攻 グローバル・ゼミ 修士2年



ウィハンコ・ニコラス・ポール | Wijangco Nicholas Paul
芸術専攻 グローバル・ゼミ 修士1年



流夢 | rumu | ルム
芸術専攻 グローバル・ゼミ 修士1年

・東北芸術工科大学



鈴木 藤成 | Tosei SUZUKI
芸術文化専攻 複合芸術領域 修士2年



篠 優輝 | Yuki SHINO
芸術文化専攻 絵画領域 修士1年



栗原 巳侑 | Miu KURIHARA
芸術文化専攻 複合芸術領域 修士2年



Yatsude Jun | Jun YATSUDE | ヤツデ ジュン
美術科 洋画コース 3年

Modern Angels



榮村 莉玖 | Riku EIMURA
美術科 洋画コース 3年



荒井 佳能 | Yoshitaka ARAI
美術科 洋画コース 3年



早坂 至温 | Shion HAYASAKA
美術科 彫刻コース 4年

【アート・プラクティショナー】8名

・京都芸術大学



永山 可奈子 | Kanako NAGAYAMA
芸術専攻 グローバル・ゼミ 修士1年



郭 瑋珂 | Guo Weike | カク・イカ
芸術専攻 情報デザイン・プロダクトデザイン領域 修士1年



鬼頭 由衣 | Yui KITO
アートプロデュース学科 3年



福井 歩純 | Asumi FUKUI
情報デザイン学科 クロステックデザインコース 3年

・東北芸術工科大学



松本 妃加 | Himeka MATSUMOTO
文化財保存修復学科 3年



横田 絢女 | Ayame YOKOTA
グラフィックデザイン学科 3年



佐藤 弘花 | Hiroka SATO
芸術文化専攻 保存修復領域 修士2年



佐藤 彩衣 | Sae SATO
工芸デザイン学科 2年

アート・プラクティショナーについて

昨年の「DOUBLE ANNUAL 2024」では、アート・メディアーター（マネジメント班/パブリシティ班）と呼ばれていた役割が、今年度から志望者の得意分野や専門分野を考慮した実務者として、「アート・プラクティショナー」へとアップデートされた。キュレーター志望者から現代美術以外を専攻する者まで、さまざまな専攻・学科から8人が集まっており、ここでも募集テーマ「omnium-gatherum」が体现されている。

主な役割は、毎月行われる作家の作品進捗確認、ミーティングの記録や進行補助、展覧会制作の過程を社会に伝えるための広報活動など、作家やディレクターたちと観客の「仲介者」として、展覧会作り全体に関わることである。また今年度は、各作家に専属のアート・プラクティショナーが付き、アシスタントキュレーターとして制作をサポートする体制がとられている。

今後は、展覧会に必要なキャプション制作やサイン作りの補助、イベントの計画など、それぞれの専門分野や興味を活かしながら活動を展開していく予定だ。さらに、作家の変化し続ける制作過程を見つめ、その言葉に耳を傾けて記録を残すこと。また、それらをテキスト化し、社会へ発信することで、展覧会と観客が交わる新たな接点を増やしていきたいと考えている。

7月キックオフミーティング

7月キックオフミーティングでは、実行委員長のヤノベケンジさんからの挨拶に始まり、ディレクターからのコメント、関係教員からの挨拶が続き、各大学それぞれの教室で作家とアートプラクティショナーが集まり、オンライン越しながらも顔を合わせたのは初めてのことになります。講義形式で座る京都芸術大学と座談会形式で座る東北芸術工科大学、すでに各校それぞれの独特の雰囲気形成されているようにも見えます。



7月のキックオフミーティングの主な目的は選考を通過した作家たちのプランの紹介でした。京都芸術大学側の写真では、写真とAIを扱うアートワークを検討しているヴィオラ・ニコラスさん（左）と、廃材を活用した巨大なしめ縄づくりを目指す菱木晴大さん（右）。それぞれの作品プランの紹介のあと、隣に座る堤さんから選考通過にあたっての興味深かった点やこれからの制作で期待したいことなどが述べられました。

東北芸術工科大学からも各作家から作品プランの紹介がなされました。写真左は東北の伝統工芸であるこけしを活用した作品を検討する篠優輝さん。また、作家プランの紹介のあと、各校のアートプラクティショナーの紹介もなされました。写真右に写るのは東北芸術工科大学のアートプラクティショナーである佐藤弘花さん。修士2年生という多忙な時期ながらのDOUBLE ANNUALへの挑戦に期待が高まります。



「Gatherum News」とは

本紙「Gatherum News」は、作品の公募テーマであった「omnium-gatherum」から名付けた広報誌である。新聞のように、広告のように、そしてなにより「gatherum」に込められたごちゃっとした情報をそれなりに整理してDOUBLE ANNUALの活動を皆様にお届けするのがその役割である。日々の打ち合わせの様子や作家の制作の様子、紙面が許せば作家やプラクティショナーたちのコメントも載せていく構想である。発行は京都芸術大学の永山、東北芸術工科大学の横田が主担当となる。二人ともキュレーションがあったり掛け持ちの役割があったりするため思うように発行できないことがあることはあらかじめご了承いただきたい。といいつつ、月に1~1.5回くらいのペースで皆様にお届けするつもりである。本当にできるのか分からないが、たいいていことは言葉にしておけばどうにかなるものである。原稿も必ずしも我々だけで執筆するのではなく、作家やプラクティショナーに振ることもあるので彼らが期限内に書いてくれるかどうかにもよる(とんでもない他責思考である)。Web媒体での発行も想定しているので、お手に取りやすい形でお楽しみいただければ幸いである。

各SNSにて随時情報を発信中です /



X (旧 Twitter)
@DoubleAnnual



Instagram
@doubleannual

- 〈編集〉 永山可奈子・横田絢女
- 〈デザイン〉 横田絢女
- 〈撮影〉 京都芸術大学 広報課
東北芸術工科大学 法人企画広報課
横田絢女
- 〈発行日〉 2024年10月10日
- 〈発行〉 DOUBLE ANNUAL事務局